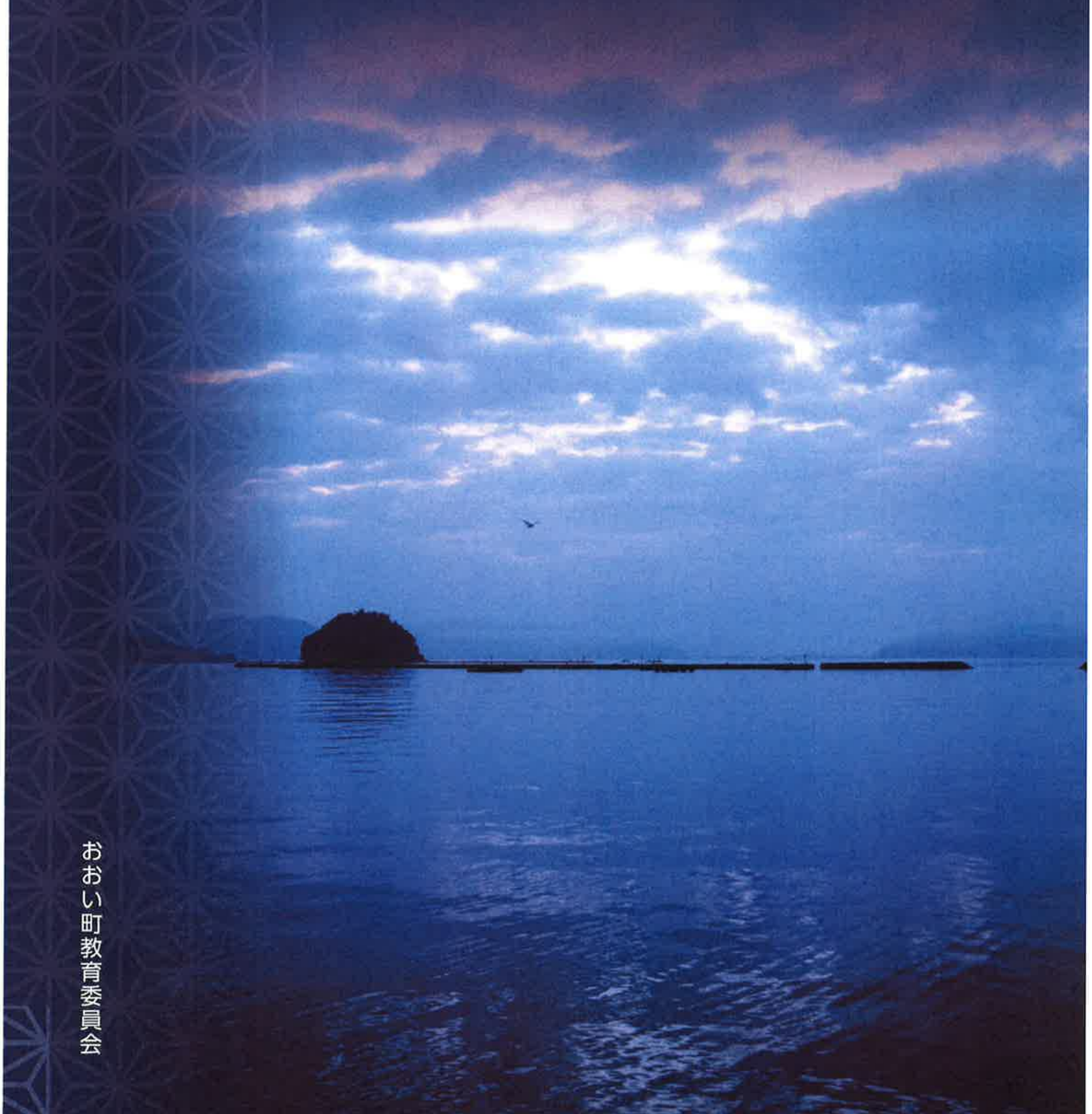
国記録選択無形民俗文化財

大島半島のニソの杜の習俗調査報告書

―資料編―



おおい町教育委員会

上野の杜１のタブノキ・小祠・カラスグチ（写真右下）

上野の杜１のカラスグチと神饌

執筆者一覧（順不同・敬称略）

今井　三千穂（福井県文化財保護審議会委員）
今石　みぎわ（国立文化財機構 東京文化財研究所研究員）
小川　直之（國學院大学教授）
多仁　照廣（元敦賀短期大学教授）
澤井　真代（立正大学非常勤講師・法政大学沖縄文化研究所国内研究員）
金田　久璋（元福井県文化財保護審議会委員）
野本　寛一（近畿大学名誉教授）
岡谷　公二（跡見学園女子大学名誉教授）
伊藤　新之輔（國學院大学大学院生）
大山　晋吾（國學院大学大学院生）

目次

巻頭図版
例言
凡例

第一章　大島とニソの杜の植生

第一節　各杜の植生分布の概要　今井三千穂……2
第二節　冠者島の植生　今井三千穂……45
第三節　タモノキとニソの杜
　—大島半島のタブノキの民俗　今石みぎわ……55

第二章　大島の年中行事　小川直之・伊藤新之輔・大山晋吾……74

第三章　大飯地域石造遺物調査データ　多仁　照廣……106

第四章　全国の森神信仰の諸相

第一節　沖縄の御嶽　澤井　真代……128
第二節　ニジュウソウとニソの杜の間　金田　久璋……150
第三節　森の諸相　野本　寛一……158
第四節　東アジアからみた森神信仰　岡谷　公二……174
第五節　森神と神樹の信仰　小川　直之……186

参考文献一覧……207
写真……211

各杜の植生分布の概要

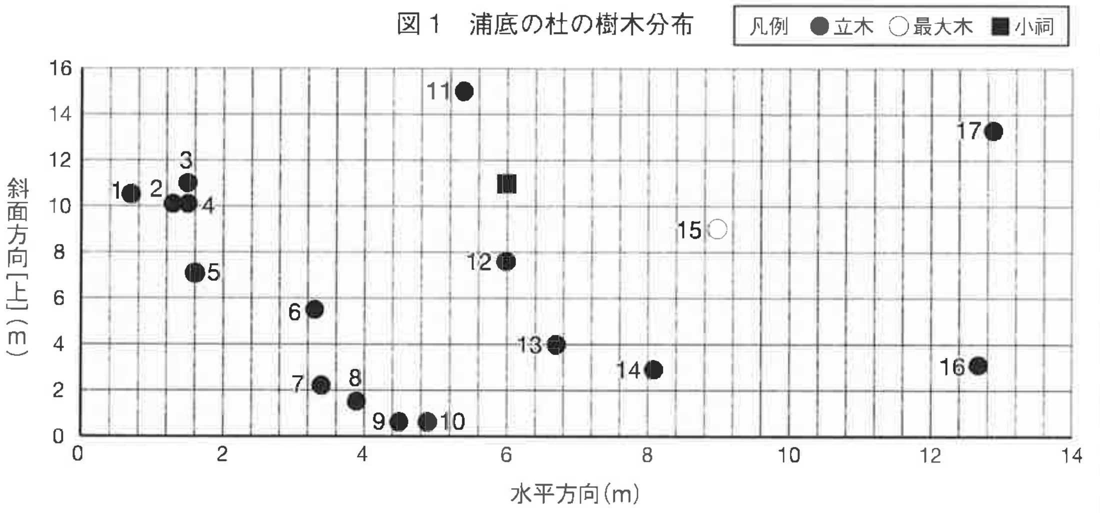
今井　三千穂

一　浦底の杜

浦底の住宅背後にある白山神社に隣接する斜面に小祠がある。林分は神社と区別できないが、タブノキ・スダジイ・シロダモの高木が混交し、下層にスダジイ・エノキ・ヤブツバキ・ビロウが亜高木層を形成している。低木の出現種はない。林床は除草管理が行われているが、タチツボスミレ・チジミザサ・タデｓｐの群生がみられ、アケビ・エノキ・ツルアリドウシ・サルトリイバラ・ドクダミなどが点在している。この杜にはタブノキの巨木が存在していたが、過去に台風の影響を受け倒木したという。この古株は現在も残っている。なお、ビロウは植栽されたものと思われる。

写真１　浦底の杜の相観

図１　浦底の杜の樹木分布



1　タブノキ（85）
2　ヤブツバキ（2）
3　ヤブツバキ（5）
4　ヤブツバキ（6.9）
5　ビロウ（10.5）
6　ヤブツバキ（0.5）
7　ヤブツバキ（12）
8　ヤブニッケイ（12）
9　ヤブニッケイ（42.5）
10　ヤブツバキ（10.5）
11　スダジイ（14.5）
12　ビロウ（8.0）
13　ヤブツバキ（10）
14　ムクノキ（16.2）
15　タブノキ（87.5）
16　タブノキ（137/伐根）
17　スダジイ（23）

（　）：胸高直径（㎝）

冠者島の植生

今井　三千穂

一　はじめに

冠者島は、日角浜区から約三〇〇m沖の小浜湾に浮かぶ小さな島である（写真1）。無人島であるが、弁財天が祀られている。

この島は対馬暖流の影響で穏やかな気候のため、森林帯は暖温帯林または暖帯林に属し、島全体が常緑広葉樹林（照葉樹林）で覆われている。地形は島のほぼ中央部に標高約二五mの山頂を有し、東および西向き斜面は緩傾斜、南向き斜面は懸崖（過去に崩壊した場所）、北向きは急斜面となっている。中腹部の土壌には腐植の堆積がみられ、この島で一番大きいスダジイの巨木（写真2）がある。この木の大きさは、樹高一五m、根元周囲七一五cmで、四本の株立ちとなっており、本体幹の胸高周囲（地上高一・二m）四〇五cm、本体から萌芽した幹が生長した三本の幹の胸高周囲は一三〇cm、一二五cm、一二〇cmであるが、この三本はすでに枯死し、うち一本が地上高七〇cmの位置で折損している。本体の幹も半枯れ状態となり、一本の枝にかろうじて葉がついている程度である。枯死の原因は、福井県自然環境調査研究会が指摘しているサギの糞害によるものであろう。調査時にも糞が林床や植物の葉に付着し、周辺に悪臭を放っている。

写真1　冠者島

冠者島の植物については、福井県自然環境調査研究会の報告があるが、林分の構造などについては明らかにされていない。そこで、北東斜面と南斜面に方形調査区を設定し、毎木調査を行った。

二　北東斜面の樹木分布

斜面に設定した方形区内の樹木の個体分布を図1に示す。単位面積当たり

写真2　スダジイの巨木

タモノキとニソの杜
―大島半島のタブノキの民俗

今石　みぎわ

一　はじめに―禁足の杜とタブノキ

ニソの杜の樹といえば、タブノキ（クスノキ科）が大きな存在感を持っている。もちろん、実際にニソの杜を訪ねると、植生はより多様である。低木層や林縁部の多様性は言うまでもなく、杜の中心と考えられる巨木がタブでない場合（スダジイやケヤキなど）も少なからずある(1)。

しかし、文化としてのニソの杜を考える場合、より重要なのは、実際の植生よりも人々の認識である。なぜなら特定の樹木に対するイメージや認識が、必ずしも科学的・客観的な実態（植物学や生態学的な特徴）の正しい反映とは限らないからである。むしろそこでは、樹木について観察された特徴の一部が焦点化されて誇大に解釈されたり、イメージ化されたり、またさまざまな伝承や慣習によって支えられることによって、特定の木に特別な意味が与えられる。まして、禁足の杜として一年に一度しか訪れないニソの杜は、実態よりもイメージによって語られる部分が大きいはずであった。

そして、ニソの杜が樹木の群れによって構成される「もり」である以上、その主要構成樹のタブノキに対するイメージと杜に対するイメージには、重なるところがあるはずである。そこで、タブノキがどのような木として認識されてきたのかをみていくことで、その向こうに、人々がニソの杜に対して抱いてきたイメージを見てみたいというのが、本稿の目的である。

なお、大島の民俗を考える場合には時代による変遷を考慮に入れることが必須である。とくに大飯発電所の誘致が決まり、半島の北端部で造成工事が始まった昭和四十年代半ば以降は、開発や生業形態の変化、観光化などによって、人々をとりまく自然・社会環境が劇的に変わってきたからである。そこでここでは人々の記憶を航空写真などで補いつつ、「原発以前」の大島の景観をできるだけ復元し、人々の認識のなかのタブを描いてみたい。

二　タモノキの民俗

（一）タモへの認識―杜と墓はタモ、お宮はシイ

大島ではタブノキはタモ、タモノキと呼ばれる。このタモを、大島の人々はどのような木として認識しているのだろうか。大島の方に「タモはどんな木ですか」と尋ねると、まずその生態的な特徴について、たいてい「成長が早い」「生命力が強い」といったこたえが返ってくる。タモは短い期間に驚くほど大きく、太くなり、その生命力は「横に他の木があると枯れて死んでしまうほど強い」と語られる〔李　二〇〇一　一一三〕。また宮留では、大風の際に折れた枝が「デンと座って（根付いて）芽が出た」と言われるように、タモは折れた枝からでも再生するという。さらにタモの葉は腐らないと言って、風が吹くたびにタモの落ち葉が雪のように降り積もり、民家に近いところでは掃除が大変だということを、複数の女性からお聞きした。

そうした生命力の一方で、意外にもタモは「弱い、脆い」とも語られる。成長の早いタモの材は柔らかく、枝分かれするので建材などには向かず、炭にしてもまったくよいものができないという。また、しばしば枝が落ちたり倒木することがあり、しかも倒れる時は「根元からドターンとこける」という。宮留では家の裏に防風林として植えたタモが、昭和三十四（一九五九）年の

大島の年中行事

小川　直之
伊藤新之輔
大山　晋吾

一　はじめに

大島の家々や各地区で伝承されている年中行事について、聞書きによって得られた内容について記しておく。大島東部の宮留区から、脇今安区、畑村区、日角浜区、河村区、西村区、浦底（西村区）の順に記していく。各地区で聞書きにご協力くださった方々は次のとおりで、とくに記載がない場合は、この方々による年中行事についての伝承である。聞書きは現状の記録を基本とし、話者が体験あるいは記憶している過去の内容も加えた。聞書きの内容は地区ごとにまとめたが、家による違いもあるため、必要に応じて家（話者）ごとに記した。なお、浦底は西村区に属するが、地区の中心部より離れており、浦底のみで行事を行っていることもあるため別に記した。

【宮留区】
一瀬艶子氏（昭和十（一九三五）年生）・中間松壽氏（昭和十三（一九三八）年生）・中間ちよ氏（昭和二十二（一九四七）年生）・長濱マツ子氏（昭和二十二年生）

【脇今安区】
大江とめ子氏（昭和八（一九三三）年生）・濱上雄一氏（昭和二十二（一九四七）年生）・大谷育雄氏（昭和二十九（一九五四）年生）・石崎靖宗氏（海岸寺住職　昭和四十（一九六五）年生）

【畑村区】
庄司庫雄氏（昭和九（一九三四）年生）・新谷省三氏（昭和十年生）・後征一郎氏（昭和十三年生）

【日角浜区】
大道兵一氏（昭和十年生）・大道千代子氏（昭和十年生）

【河村区】
大谷光始氏（昭和十年生）・宮崎一夫氏（昭和十三年生）・宮崎充子氏（昭和十三年生）・杉本龍心氏（馬居寺（高浜町）住職・宝楽寺兼務住職）

【西村区】
前西芳子氏（昭和十年生）・下西保子氏（昭和十二（一九三七）年生）・佐近春子氏（昭和十三年生）・森下千代枝氏（昭和十七年生）・西森孝子氏（昭和二十六（一九五一）年生）

【浦底】
石田光男氏（昭和十八（一九四三）年生）・石田恵美子氏（昭和二十三（一九四八）年生）

二　正月準備

【宮留区】
十二月三十日に正月の餅を搗き、鏡餅をつくり檀那寺である海岸寺（臨済宗、脇今安区所在）の位牌の前に鏡餅とお金を供えに行く。三十一日には大掃除を行い、正月の注連縄などの取り付けなどを行う。

正月飾りである家の鏡餅は、ウラジロを敷いた上に二段重ねにし、この上に串柿を二個のせたものを、天照皇大神・金比羅さん・恵比寿さんを祀る神

大飯地域石造遺物調査データ

・本調査データは、おおい町の大飯地域に点在する石造遺物について調査したものである。
・データは大島地区、本郷地区、佐分利地区の三地区に分け、地区内の各集落ごとにも分けた。
・地区内すべての石造遺物を網羅したわけではない。町境の峠など、土砂崩れ等で現地へ行くことができなかった箇所もあった。
・緯度、経度、高度はおおよその数値であり、神社や寺院では1ヵ所で測定した数値を、その範囲内の石造遺物すべてに採用している箇所もある。
・「年月日」について、石造遺物自体には漢数字で明記されているが、調査データは算用数字で表記した。
・平成時代に造られた石造遺物も対象とした。石材については調査の対象としていないため、今後の課題としたい。
・名田庄地域については現在調査中である。大飯地域も含め引き続き調査を続け、すべての石造遺物のデータ収集に努めたい。

大島地区

No.	地区	場所	緯度	経度	高度(m)	種類	碑文1	碑文2	碑文3	年月日	西暦	備考
1	宮留	八幡神社跡	35,531,473	135,660,000	1.9	石柱	八幡神社跡	當村宮城助太夫外三人		明治44年5月18日 島山神社合祀	1911	
2	〃	〃	〃	〃	〃	狛犬(対)						
3	〃	〃	〃	〃	〃	狛犬(対)						
4	脇今安	海岸寺	35,532,484	135,654,900	7.1	石柱		良岳第施主藤原鶴正	相國寺派管長止止庵	昭和58年6月	1983	
5	〃	〃	35,532,402	135,654,890	9.1	石仏	地蔵	祖誠		嘉永2乙酉年	1849	
6	〃	〃	〃	〃	〃	石柱	寄付金			昭和26年3月	1951	
7	日角浜	島山神社	35,527,048	135,645,413	9.4	鳥居						
8	〃	〃	〃	〃	〃	石碑	還暦記念	鳥居奉献者氏名		昭和17年9月	1942	鳥居建立
9	〃	〃	〃	〃	〃	瑞垣	初老記念			昭和58年11月	1983	
10	〃	〃	〃	〃	〃	石碑	初老記念			平成3年10月	1991	
11	〃	〃	〃	〃	〃	石碑	初老記念			平成7年11月吉日	1995	
12	〃	〃	〃	〃	〃	石燈籠(対)	初老記念			昭和55年11月吉日	1980	
13	〃	〃	〃	〃	〃	狛犬(対)	初老記念	奉献		昭和49年5月吉祥日	1974	

沖縄の御嶽

澤井　真代

一　はじめに

樹木に覆われた聖域に、日時を定めて人が入り、祈りを捧げる。この点において、若狭大島のニソの杜と沖縄の御嶽は共通する。一方で、聖域に人が入る日時や頻度、祈りの内容と方法をはじめ、当然のことながらニソの杜と沖縄の御嶽とでは相違点も多く、それは両者についての研究史にも及ぶ。本稿では、両者の研究史を確認したうえで、沖縄の御嶽の構造・祭祀者・祭祀・祭神について、ニソの杜との差異に注意しながら検討する。ニソの杜との比較の観点から沖縄の御嶽の特質を指摘し、ニソの杜の多角的な理解に向けて一資料を提示したい（一）。

二　ニソの杜の研究史から

ニソの杜は、戦前に発表された安達一郎、鈴木棠三による大島の民俗誌の中で、宗家二十四名の祖神をまつるものとして取り上げられた。安達は「村の経済」「年中行事」「結婚の風と産小屋制度」等のテーマとともに「二十四名と『ニソの杜』」という項目を掲げ、大島で旧暦十一月二十二日の夜に杜の神前に供物を上げ、二十三日に直会式を行うニソの杜の祭祀と、杜に付属する神田について記している〔安達　一九三九　一七～二三〕。鈴木は「島山明神」「産育習俗」「葬送習俗」等から成る民俗誌において、ニソの杜に関しては「島祖の祭り」「ニソの杜」「ニソの性格」という項目を立て、三〇ヵ所の各ニソの杜の所在と祭司者等について、地元の研究者である大谷信雄からの聞き書き資料に主に基づいて報告している〔鈴木　一九七六（一九四四）三九四～四二四〕。鈴木はニソの杜の性質について、大枠では宗家を中心に祖神をまつるものとして捉えながらも、資料の細部にわたる検討ではニソの杜の祭祀者の地縁的結合にふれている〔鈴木　一九七六（一九四四）　四〇四〕。ここにすでに、ニソの杜の祭神は祖霊か地霊か、ニソの杜祭祀は血縁祭祀か地縁祭祀かという、戦後の研究史におけるニソの杜をめぐる議論の素地となる要素をみとめることができる。

戦前に鈴木が聞き書きを行った大谷信雄のもとを、終戦後の昭和二十四（一九四九）年に訪れた安間清は、書簡を通じ柳田国男から教示を受け、ニソの杜に焦点を絞った報告を行なった。終戦後間もない時期の柳田は、『先祖の話』および『祭日考』『山宮考』『氏神と氏子』を世に出し、祖先崇拝・祖霊信仰から発した氏神信仰を日本人の固有信仰の中心に置く考察を練り上げていた〔佐々木　一九八三　三～八〕。こうした時期に柳田と手紙を交わした安間は、手紙を通じて、「氏神に対する氏の森」たるニソの杜の詳細を調査するように強く促される〔安間　一九八〇　二六～二九〕。昭和二十四年の夏に第一回の大島調査を行なった安間は、同年十月に先の旨の手紙を柳田から受け取ると、同月中に再び大島を訪れ調査を実施し、大谷信雄の手による資料を得て、ニソの杜についての報告をまとめた。

そこで安間は、当時にあって宗家の明らかなニソの杜は少数であるとしながらも、ニソの杜の小祠の中の神札に「遠祖大神」という文字が記されていることや〔安間　一九五二　五〕、古墳の跡に立地するニソの杜に着目するとともに〔安間　一九五二　五〕、大島の両墓制における埋葬地「サンマイ」の跡をニソの杜と捉える村人の話や〔安間　一九五二　六〕、祖霊の「ニギミタマ」をまつる余永神社との関係からニソの神を「アラミタマ」とする村

ニジュウソウとニソの杜の間

金田　久璋

一　柳田国男の語源説の課題

安間清編著『柳田國男の手紙―ニソの杜民俗誌』（大和書房　一九八〇）のなかで、柳田が「ニジフソ」について出身地の播州の事例を挙げて説明し、東国の大師講にも言及していることは、大島固有とされがちなニソの杜の信仰に広く多角的な視点を指摘するものであった。実際に「ニソの杜」という民俗語彙は当地以外には存在しないから、他との比較検証のきっかけを呼び覚ますものである。

安間宛ての手紙（十七）に柳田は次のように述べている。

此島には「ニソの森」と称する霊地、各株に属して存在し、それは氏神に対する氏の森ともいふべきものらしく、何故にニソと謂ふならんかとの鈴木の問ひに答へて、多分旧十一月二十三日即ち東国にて大師講などといふ日に此森を祭る故にニソ（二三）といふならんと答へ置き候。播州にては歳時語彙にも掲げし如く、此日はもはや節日には非ざるも、之をニジフソと称して何か変つた食物だけはこしらへをり候故、此如く想像せしに候。

（十七　昭和二十四年十月二十日付、封書）

ちなみに、「歳時語彙」すなわち『歳時習俗語彙』（国書刊行会　一九七五）には、「ニジフソ」の項に「旧暦十一月二十三日を、播磨の東部各郡でニジフソと呼んで居る。休みでは無いが小豆飯に油揚などを添へて、地神様又は稲荷様を祭る家が今でもある（多可郡誌）。現在は新嘗祭と合併するやうになつた（美嚢郡誌）。是が他の地方で大師講といふ名で呼んで居る古い節日の名残であることは、比較によつて始めて判つて来るのである」とあり、まさしく民俗事例の比較検証がいかに重要であるかについて喚起をしている。この解説は文体からして柳田自身が書いたものとみて相違ない。

なお、詳しく『改訂　綜合日本民俗語彙』第三巻（平凡社　一九五五）の「ニジュウソ」は、以下のように記している。

ニジュウソウともいう。兵庫県東部の各郡で、旧暦十一月二十三日の地神の祭日のこと。多可郡では休日ではないが、小豆飯に油揚などを添えて地神様または稲荷様を祭る家がある（郡誌）。加東郡小野町（小野市）でも、屋敷内に祀ってある地神を祭る霜月二十三日を、ニジュウソウと呼んでいる（民伝十五ノ二）。美嚢郡などでは、現在は新嘗祭と合併するようになった（郡誌）。朝来郡中川村奥八代（朝来町）部落では、この日をスリコギカクシともいって、大師伝説を伝えているから、これが他の地方で大師講の名前で呼ばれる古い節日の名残りであることがわかる。

柳田の解説に加東郡や朝来郡の事例を加筆しただけの簡略な記述であるが、「ニジュウソウ」が旧暦十一月二十三日の異称であることと、地神や稲荷の祭日として「スリコギカクシ」の大師伝説を伝えていることから、全国の「大師講」と関連する歳時習俗であることが推考されている。ちなみに柳田国男監修・民俗学研究所編『民俗学辞典』（東京堂出版　一九五一）には立項がなく、「秋祭」のなかで「ニジッソ」の語彙が見える。また、西角井正慶編『年中行事辞典』（東京堂出版　一九五八）にも「二十三夜」の項で「ニジュウソ・ニジュウソウ」への簡単な言及があるに過ぎないし、『日本民俗大辞典』（吉

森の諸相

野本　寛一

一　はじめに

人は生命を維持し、暮らしを充実させるために、また、社会生活を営む中で自然環境に手を加え、環境を変化させてきた。山野は時の流れとともに開発・開拓されてきた。そうした中でも「森」は守られてきている。この国のすべての人びとが森を大切に守り続けてきたとは言い難いのであるが、森に心を惹かれ、森に親しみ、時に森を畏れてきた人びとも多かった。また、森に守られることを知り、森を守ってきた人びともいる。森とはいったい何なのか、森にはどんな森があるのだろうか。

柳田国男は森について次のように述べている。「森といふものは、要するに、人民が憚って開き残したる土地の一部をいふことになる。神聖なる地域に於ては、一木一草と雖も採取を厳禁して居つたが故に、周囲は悉く熟田に化して仕舞つた後世に於ても、其森ばかりは真黒に繁つて、単に巨木があり、人家がないといふ計りでなく、一種人工の樹林などとは異つた光景を呈して居つたのである」――この見解にそって考える際、文中の「憚り」の対象・要因をさぐる必要がある。また、森の規模や樹種について、「憚り」にかかわらない森はあるのか否かなどについても考えてみなければならない。

「モリ」の漢字表記は「森」「杜」によってなされる。森は樹木が多く生え、こんもりと繁ったところを意味し、杜は神社・社のある森や、信仰にかかわる森について用いる慣用がある。杜の本義はバラ科の落葉喬木のヤマナシであるが、社叢への転用はこの国の人びとの信仰の心意によるものだった。ここで扱う「モリ」は、「杜」系が多いのであるが、信仰にかかわらない「モリ」も含むので、小論では「モリ」の表記は「森」とした。この国にはどんな森があるのか、森の諸相をさぐってみたい。

二　樹と森のあいだ―巨樹・畸形樹・相生樹―

森を成すものは樹木である。憚りの眼ざしを受けるものは森のみならず一本の樹木であることもあり、いわゆる森の概念には入らないような数本の樹木の固まりである場合もある。百枝なす一本の巨樹は小さな森以上の力を持ち、存在感を示す。相生の畸形樹は特殊な森となる。ここでは、こうしたものにも注目したい。

『筑後国風土記』（逸文）「三毛郡」に以下の伝説がある。「昔者、棟木（あふち）一株（ひともと）、郡家（こほりのみやけ）の南に生ひたりき。其の高さは九百七十丈（つゑ）なり。朝日の影は肥前（ひのみちのくち）の国藤津の郡の多良の峯を蔽（おほ）ひ、暮日（ゆふひ）の影は肥後（ひのみちのしり）の国山鹿の郡の荒爪（あらつめ）の山を蔽ひき。云々。因りて御木（みき）の国と曰ひき。後の人訛（よこなま）りて三毛（みけ）と曰ひて、今は郡の名を為す」――。こうした巨樹伝説は他にも見られるのであるが、辰巳和弘は以下のように述べている。「天空高くそびえる巨樹と、朝日夕日をうけて遠くへのびる樹影のイメージから、やがて四方に大きく枝葉をのばし大地を覆うかのように繁る広葉樹の樹相は、王権のおよぶ版図を観念する象徴とみなされるようになる。そして槻こそが古代ヤマト王権の王宮にもっともふさわしい聖樹と認識され、その樹下にこそ王宮が営まれるべきとする考えが生まれたらしい」として事例で裏づけをしている。『万葉集』（二一三）に「百枝槻の木（ももえつき）」という表現がある。大きな枝を四方八方に張る欅の巨樹に対する賛称表現である。

巨樹・老樹に対する尊崇は古代に限ったものではない。能舞台の鏡板に描

東アジアからみた森神信仰

岡谷　公二

私が、社殿のない、森だけの聖地に開眼したのは、沖縄でのことだった。昭和三十六（一九六一）年夏、私は一ヵ月にわたって沖縄を旅した。当時沖縄はアメリカの軍政下にあり、渡航にはパスポートが必要で、しかも観光旅行は許されず、所要があって、現地での身元引受人がなければパスポートは下りなかった。そんな面倒な条件をクリアーしてまで沖縄にゆかねばならない差し迫った目的など私にはなかった。日本の最南端にゆきたいというまことに他愛ない衝動に駆られていただけのことだった。

新幹線はなく、飛行機も使えない時代で、七月十四日の一三時に東京を発ち、七月十八日の朝に那覇に着いた。船待ちの時間を入れると、満四日もかかったわけである。羽田から二時間半で那覇空港へ着いてしまう今と比べるとまさに隔世の感がある。

私は那覇に一週間滞在したあと、一昼夜かけて石垣島へ渡り、さらに定期船のなかった最南端の波照間島までやってきた。

当時島には旅館も民宿もなく、私は、身元引受人であった琉球大学の助手（後年、沖縄国際大学々長）だった故永野善治氏の教え子玉城功一さんの家に泊めてもらった。

ある日、その家の高校生の弟さんが私を散歩に連れ出してくれた。砂糖黍畑や蘇鉄の原野を歩いていると、やがて左手遠くに、木々が黒ずむまでに茂った、周囲一五㎞の島にしては異常に大きい森が見えてきた。御嶽（うたき）ということだったが、弟さんは、まるで見てはならないものでもあるかのように、反対の方向へと私を引っ張っていった。

翌日、私は好奇心からその御嶽へまた行ってみた。しかしまわりを少しまわってみたけれども、どこにも入口らしきものがなく、仕方なしに、濃密に茂った南方系の木々の枝葉をかきわけて中へ入ってみた。中には、白砂を敷いた広い空間のほかには全く何もなかった。社殿も、祭壇も、香炉すらも……。人工のさかしらの一切ない、その清浄感、神秘感は、私がこれまで全く経験したことのないものだった。ここでは、何もないがゆえに森こそが主役であり、そこが神の訪れる場所であることをはっきり示していた。

私は東京へ帰ってから調べてみて、この島には、三つのきわめて格の高い御嶽があり、私が入ったのはその一つであることを知った。宮良高弘氏は、その著『波照間島民俗誌』（木耳社　一九七二）の中で、「これらの御嶽はピィテーヌワー（野原の御嶽）とよばれ、人里遠く離れたところにあり、森林に深くおおわれている。……そして森全体が聖地だと考えられ、鳥居、拝殿、香炉などもなく……最も神高い御嶽とされ、特定の祭祀以外は、司を除く部落民の入域は全く禁ぜられている」と書いている。私は知らずして、入域の禁を犯してしまったのである。

この経験以来、私はいわば御嶽狂いとなり、ただ御嶽を見たいばかりに沖縄へゆくようになった。そうした御嶽めぐりはもう半世紀を超えている。私は、沖縄の、ごく小さな離島も含め、ほとんどの島に渡った。どこにも必ず御嶽があり、しかも社殿のない、森だけの聖地というそのありようは、北の山原（やんばる）から最南端の波照間島まで少しも変わらなかった。

たとえば本島南西部、知念半島久手堅にある齋場御嶽（セーファーウタキ）。ここはかつて琉球王家の御嶽だったところで、最高の神女聞得大君の即位式御新下り（うあらお）が行われてきた。本土の伊勢神宮に相当する最も位の高い御嶽だ。御門口（うじょうぐち）と呼ばれる入口には、世界遺産に指定された今では入場券売場の小さな小屋まで建っているが、かつては門も鳥居すらなく、古びた石燈籠が二つ立っていただけ

森神と神樹の信仰

小川　直之

要旨

本稿は、島根県古代文化センターとの研究協定に基づいて行った森神など聖地信仰にかかる共同研究の成果の一部である。島根県の出雲地方の荒神森や石見地方の大元神などの森に関する祭祀から森神と神樹の信仰について検討したものである。島根県の荒神森や大元神の森などの森神信仰について、まず直江広治や白石昭臣、坂田友宏、山崎亮など従来の研究を検証し、森神はこの中の特定の神樹を定めて祭祀が行われ、この場は立ち入りや木の伐採に関する禁忌が存在すること、その信仰は祖霊信仰と一元的に結びつけて検討が行われてきたことなどを確認した。その上で、第一には森神といえる祭祀空間はどのような場なのか、第二には神樹はすべてが依代なのか、そして第三には神樹と森神との関係をどのように考えるか、という三つの問題に絞って具体例の分析を進めた。その結果、神樹として祀られる樹木への心意は、依代という機能だけではなく、樹下託宣、卜占、結界表象、族霊、樹霊という機能や心意ももち、また森神を形成する樹木としても存在することを明らかにした。そして、こうした神樹と森神との関係は、それぞれが個別に存在するのではなく、連続性が認められ、上代の「もり」の概念や森神の実態から、森神は神樹の祭祀と信仰を基盤にして形成された聖地信仰ではなかろうかと推測した。また、神樹の祭祀や信仰については、筆者の調査資料も含めて韓国、中国、台湾、インドの具体例をあげながら検討し、アジア圏における比較研究の必要性を示した。

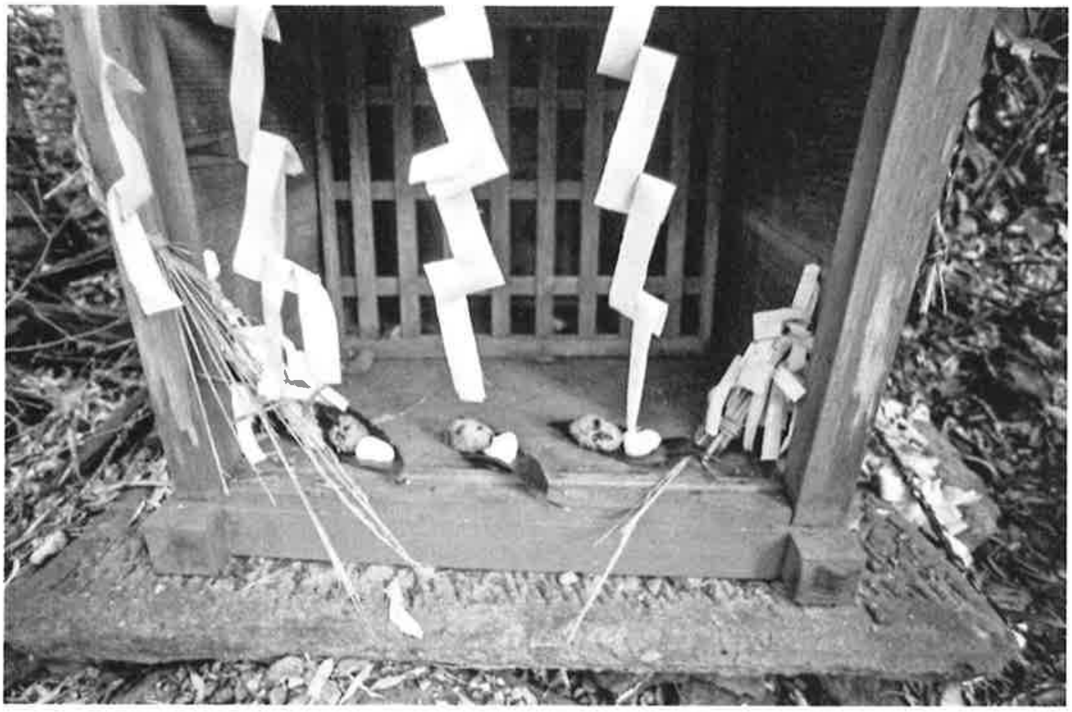
一　島根県の荒神・大元神祭祀

島根県の民俗文化を特色づけるものの一つに荒神や大元神の祭祀がある。荒神祭祀は島根県の出雲地方、そして大元神の祭祀は石見地方に顕著に見ることができる。白石昭臣は「山陰地方のモリ—荒神・大元神」（一九九五）で、「杜と樹木にカミを斎きまつる民俗信仰のなかで、山陰地方には、鳥取から島根の出雲地方にわたる荒神、石見の大元神というモリ神ともいうべき信仰が、いまも根強く伝えられている」として、この荒神信仰は「いわゆる壇乙制度による江戸時代からの石塔墓での祖霊祭祀より古い、モリの樹木に死霊を斎き祀る民俗信仰を感得する。それが、同時に作神でもあるところにも、特色があるといえよう」と指摘する。そして、石見の大元神信仰についても「モリの樹木に祭る出雲地方の荒神と同じ形態の民俗信仰として石見地方の大元神を挙げることができる。名称が異なり、大元というのは、中世期以降、京都の吉田家が、この地方の神祇を管轄したことによろう」という。

ここでは荒神や大元神祭祀の個々の事例はあげないが、荒神にしても大元神にしても、その表象は神樹であったり、伐採や立ち入りに対して強い禁忌をもつ森であったりするのが通常である。従来の荒神や大元神に関する研究は、集落で祀る「親荒神」や同族団で祭る一族荒神など、その祭祀形態や、先の白石の指摘からもうかがえるようにこれらの神がもつ性格、なかでも死霊や祖霊祭祀との関連が関心事となってきた。

島根県に隣接する鳥取県を中心に研究を続けている坂田友宏も山陰地方の荒神祭祀を次のように考えている。

出雲や伯耆では荒神の森をフロと呼ぶが、ところによっては、部落・組といった小規模な地縁神を祀る荒神ブロの方が、一村の氏神の宮ブロより



10　オンジョウの杜　供物（昭和40年代）

11　神田の杜　祭祀の様子（昭和40年代）